いきいきする社会づくりを期待します

元テレビ東京キャスター宮崎絢子さんを訪問

後援会ニュース編集部では新年年幕開け早々、浦和区にお住まいで長らくテレビ東京でアナウンサー、キャスターで活躍されていました宮崎絢子さんにインタビューをお願いしました。宮崎さんはお仕事の傍ら、マスコミ九条の会の呼びかけ人、日本ジャーナリスト会議（ＪＣＪ）の代表委員を務められるなど、平和運動にも積極的に活躍されています。また退職された後も都内でユニークなヴォイストレーニングを開講するなど現在も多方面で活躍されています。

Q．女性キャスターの草分けと言われてますが、これまでの経歴をお願いします。

大学卒業後、中部日本放送にアナウンサーとして入局しました。大学は女子大でお見合い写真をとって卒業時には決まっている人もいたという時代で、就職する人は殆どいませんでした。私は両親とも教師をしていたので、仕事をするのが当然と思っていたのですね。１９６４年、東京オリンピックの年にテレビ東京１２チャンネルの開局にともなって、移籍しました。

私はステーションアナウンサーでしたが、当時はすべて生放送ですから大変です。広告も番組の合間に入れますが、それもまた生放送なので、今よりも大変だったと思います。日勤、夜勤の繰り返しで、基本的に男社会のようなところですね。殆ど休みはとれません。夏休みが１１月頃なんていう笑い話もあります。今でこそ１週間休みなんて当たり前になってますが、当時は３日休んだら何だと言われる時代です。また仕事の性格上、そういうことができにくい所もありましたね。私もディレクター時代、阪神大震災があって、１週間の休暇予定の部下の男性にキャンセルさせて現地にとんでもらい、今でもそのせいで結婚できませんと恨まれています。

キャスターは今でこそ、契約の方フリーの方など番組専属の方が多いのですが、私の場合は、局アナですから、取材、現地レポート、特集番組など何でもやりました。そういう時に大変なのは、体力維持もそうですが、頭の切り替えも大変です。災害報道あり、バラエティーあり、特集番組ありで気分転換が大変です。また常に社会現象にアンテナをはっていなければいけないし、事前調査もしなければなりません。睡眠時間は夫の母の介護をしながら勤めていた時は平均３時間半位の時もありました。ですから、現職を辞めた時、あー普通の生活ってなんていいんだろうと思いましたね。

Q．ＪＣＪ代表委員やマスコミ九条の会の呼びかけ人になられてますがどういうきっかけだったのでしょうか？

テレビ東京に入ってすぐに２００人合理化闘争がありました。組合活動が大変活発な時代でしたから、すぐに組合に入っていろいろ勉強し活動しました。特に女性は結婚したら会社を辞めさせるとか、女性というだけで様々な差別があるのに怒りの声を上げて反対運動を続けてきました。ＪＣＪでは、まだ女性の参加者が少ないこともありましたが、長く活動していたことから代表委員に推されました。また私は以前から憲法９条を守るのは当然だと思っていましたので、マスコミ９条の会には自然にかかわるようになり、呼びかけ人にもなりました。今マスコミのみなさんは、仕事が激しく変化しますからな

かなかそうした活動をする時間が取れず大変だと思います。

Q。安倍首相の新聞、放送局等経営者との会食をどう思われますか？

　それによって簡単にいいなりのなるということはないと思いますが、自主規制はおこりうると思いますね。安倍さんはちょっと多いですね。それだけメディアを味方につけたいとの思いなのでしょう。勿論マスコミやメディアで働く人の中には良心的な人もたくさんいるし、きちんとやっている人もいるということは知って欲しいと思います。あと、マスコミやメディアを守るのは、受け手の皆さんであるということを忘れないで欲しいと思います。おかしいと思ったら、投書したり、意見を出していくことが大事です。そのことが最もいい励みになります。

Q．メディアにかかわってこられて今お考えになっていることは？

　日本人はなかなか意見を言わないですね。他国に比べおだやかなんです。誰かがやってくれる、お上のいうことを聞いてじっと大勢を見ている。かといって日本人に人権意識がないかというとそうではない。あるんだけれども、行動に出すとなると抵抗がある。それって一体何なのでしょう。都市と地方ということでもないですね。だって昔田舎にいた人が東京に来ているわけですから。長いものにまかれろ、なのかしら。タテ社会がぬけきらない、そういうふうに感じています。でも社会は皆さんの力で変わっていくと思います。ここにきて実際に変わってきているし、更に変わっていくと思います。

　実はそういうことに少しでも役立ってほしいと思って、ヴォイストレーニングを始めたのです。

Q. えっ。そうなのですか。そのヴォイストレーニングについて是非お聞かせください。

　女性が意見を言える時代になっているのに、いざ言えるかとなるとなかなか言えない。それには日頃から意見を持つように考えことも大事ですが、いきいきと大きた声で話せるように訓練しておくことが大事と思い、特に女性のためにトレーニングを始めました。実際にはトレーニングに来られるのは男性の方が多いので意外でした。男性の方も５０代になると別ですが、問題は３０代になってリーダークラスになる時を迎えても声が出せない人が多いんです。それはやはりもったいないですね。最近は大学生からそういう人が増えてきています。面接できちんと話せないという人、コミュニケーションがうまくとれないという人が増えて危機的なことになっていると思います。パソコン、スマホばかり。食事も問題。ちゃんと声が出ないということはいきいきとしていないということです。いきいきしていれば声は出るようになります。そういうことで体操をして身体作りから始めます。２年位たつと皆さんいい声で良く話せるようになります。

Q。共産党へのご意見はいかがですか？

　とても素晴らしい活動をしていると思います。ただ素晴らしのはわかるんですが、いかにみんなと楽しくやるか、そこが難しいところですね。共闘しようというときに、自分だけがやったのじゃなくて、みんなでやったのだということをもっと言って欲しいと思います。迫害されてきたからそうなってしまうのでしょうか、自分だけがというのを強調すると、一緒にやっている人が、ああなりたくないと思って離れて行ってしまいます。あの人のようになりたいというイメージが欲しいと思います。もっとリラックスしてもいいんです。最近は若い人に、明るくいいイメージを持った人が出てきてますね。大事にして欲しいと思います。

Q．市議選に向けて、とりうみ敏行候補と共産党への応援メッセージをお願いします。

シニア世代、老人が増えてくる中で、そういう方々がいきいきと暮らせる、元気で幸せに暮らせる、そういう課題に私は関心があります。とりうみさんは、以前から活躍されている方と存じてますが、これからも、是非そういう課題に取り組んでいただければと思います。私もやがては、都内から地域で過ごすことが増えていくと思いますが、何かお手伝いできることがあれば協力したいと思っています。是非当選に向けて頑張ってください。

どうもありがとうございました。

添付資料

１．ベアテの贈り物　ストーリー

リストの再来”と謳われたピアニスト、レオ・シロタの娘として、1923 年、ウィーンに生まれたベアテ・シロタ・ゴードンさん。5 歳の時、山田耕筰に招かれ東京音楽学校（現・東京芸術大学）の教授となった父と共に来日した彼女は、第二次世界大戦を挟み再来日した際、日本国憲法の草案作成の委員に起用され、そこに女性の人権の確立を盛り込んだ。生憎、条文の多くは GHQ の委員会で削除されたが、人権に関する 14 条と男女平等に関する 24 条に彼女が書いた条項の一部が残った。そして 46 年 11 月３日、日本国憲法公布。以来、日本女性の社会進出は目覚しい。46 年には女性が初の選挙権を行使し、39 名の女性議員が誕生した。また、労働省に婦人少年局が置かれ、山川菊栄が初代局長に選ばれた。47 年、家父長制度が廃止、更に教育基本法が施行され男女共学が実現。その後も、“国連婦人の 10 年”の女子差別撤廃条約の批准、国籍法の改正、家庭科の男女共修、男女雇用機会均等法の成立など、真の男女平等を遂げつつある。日本で度々講演を行っているベアテさんは、最後にこう締め括った。「今の日本の女性は素晴らしいです。どうかこの憲法を一層生活の中に活かし、今度は世界の女性たちのために働いて下さい」と。

２．雨宮処凛さんと宮崎絢子さんの対談

JCJ ホームページ　に　雨宮処凛さん（作家）と宮崎絢子さん（JCJ 代表委員）　の対談が掲載されていましたので引用させていただきます。

雨宮処凛さんはご存知のかたも多いでしょう。
宮崎さんは JCJ 代表委員。テレビ東京の出身です。

宮崎　怒らない日本人というのは不思議ですね。わたしが働き始めた頃は女性差別が非常にきつかった。やはり怒りましたよ。怒ったから生き残ってきたと思う。
雨宮　何に対して怒ったのですか。
宮崎　制度です。若年定年制というのがあって、25 歳になったら女はクビみたいな規則があったわけです。
雨宮　えーっ。すごい。
宮崎　すごいでしょ。結婚したらクビにするよ、という制度に対しても抵抗した。また、女も人間として男性と平等だ、女だからという理由で差別されるのは納得できないと職場で声を上げました。就職してすぐにビラをまいて最初に女性を集めたのです。そうしたら会社にも睨まれたけど組合にも「お前は何をやる気だ」と呼び出されて怒られました。
宮崎　マスコミに対してはどう思いますか。
雨宮　大企業との関係で色々あるのだろうなと･･･。

　取材の仕方も「日本にもこんなに可哀そうな貧しい若者がいます」みたいで嬉しくないですね。　珍しい生き物のように。
宮崎　マスコミの正社員の人たちは、特に 80 年代後半からはエリートなのです。上の方は見るけど下でやっている人たちには注意が向かない。
雨宮　格差問題はブームになっているのですが。ブームで終わらせられたら困る。

３．マスコミ九条の会での講演

「米軍基地のあるところ、女性への陵辱・殺害が日常化される」宮崎絢子（ジャーナリスト・放送） 06/01/17

九条の会がすでに4000を超えたとのこと、着実に広がっていることは嬉しいことです。

私の周りでも「憲法九条を守ろう！」「憲法九条こそ日本の宝」と声を上げる人たちが増えてきています。今まで黙っていた人たちも、声を挙げなければと思うようになってきたのではないでしょうか。しかし、依然として改憲勢力の動きは活発でかなり強引。マスコミもその力に引っ張られている感は否めません。私たちは粘り強く着実に、九条を守る運動を重ね、戦争をしない国の生き方を、世界に発信してゆかねばと思います。

「日本も軍隊をもってこそ一流国になれる」「自衛隊はもう立派な軍隊だ。米軍とともに戦闘訓練もしているし、現状を追認するには憲法を改正しなければ！」という意見を言う人もまた、男女を問わず、私のまわりにも沢山います。この 60 年間戦争をしない国として、人を殺さずにやってきたことの尊さをなかなか実感できないのでしょう。

“平和だね！”といった老人の表情

今年の成人の日に、戦争で成人を祝ってもらえなかった人たちが、60 年目の成人式を祝っているというニュースをテレビで見ました。インタビューに答えていた一人の老人の言葉がとても印象に残っています。「本当に生き延びられて良かった。私たちのときは成人式なんて無かった。兵隊検査はあったけど、成人を祝ってもらった覚えは無いねー。」「一番大事なのは平和だね。二番目は健康、三番目はお金かな？」ハハハとその人は最後に笑いましたが、「平和だね！」といったときの顔はなんともいえず感慨深げでした。

戦争をする国になるということは無差別に人を殺すということです。

人は誰でも、本当は、平気で人を殺せるものではないのです。平気で人を殺せるようになるために、米軍は色んな教育をしていると聞きます。最近では人殺しのシュミレーションゲームを無料で子どもたちに配っているという報道もありました。

軍隊の本質を、今しっかり見抜くとき

沖縄で米軍基地を無くす運動を続けている人から聞いた話ですが、米海兵隊の教育の中に、「女性を蔑視させる」というのがあるそうです。そのためには自分の母親を軽蔑するように仕向けるのだそうです。このことをアメリカに行って訴えたとき、一人の母親が怒って「そんなことは絶対にない。私の息子が私を軽蔑するなんてありえない。息子に確かめる！」といきまいたそうです。しかし翌日になってその母親はすっかり意気消沈してやってきて「息子に問い詰めたら、ママそのとおりだよといった」と泣いて話してくれたといっていました。

米軍基地のあるところでは女性に対する暴力、レイプや殺人が絶えません。

まず女性を軽蔑し、そして陵辱し、殺害することをなんとも思わない人間をつくるところが軍隊であるということ、人権を認めないことが、彼らの正義であるという軍隊の本質こそ、憲法九条を改定し、憲法 24 条を変えようとしているものの本質であることを、強く訴えたいと思います